

医療系女子学生のおしゃれ障害の実態

秋田大学医学部附属病院第二病棟 5階

柳田 明里

秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻

成田 好美

要 旨

近年、おしゃれがより過剰になる傾向にあるが、その中には身体の健康に悪影響を及ぼす危険なものも増加していると言われている。おしゃれに伴う健康被害は「おしゃれ障害」と呼ばれ、様々なおしゃれによる実例が報告されている。本研究は、医学および看護を学ぶ医療系女子学生における「おしゃれ障害」の実態を明らかにすることを目的とした。A大学に在学する医療系の女子大学生1～4年生158名を対象に、16項目のおしゃれ内容に関するアンケート調査を行った。その結果、医療系女子学生は、手軽に自分で行うことのできるおしゃれの経験割合が高く、専門店などのサービスが必要なおしゃれ経験割合は低いことが示され、これは一般の女子学生と同じ傾向であった。おしゃれ障害で最も高かった項目は、「ヘアカラーによる髪の毛の傷み、頭皮のトラブル」であり、次に「専門店での体毛処理による皮膚のトラブル」が多かった。また、おしゃれ障害は、おしゃれ行為の種類が多いほど発生しやすかった。医療系女子学生は身体の知識により、おしゃれによって発生する身体の変化に敏感であること推測された。

キーワード：おしゃれ障害、おしゃれ行為経験、医療系女子学生

I. はじめに

化粧品やアクセサリー類、衣服などによって自身を着飾ること、いわゆる“おしゃれ”をすることは人々の生活を華やかにし、自信を与えるものでもある。若い世代では、カラーコンタクトレンズやヘアアイロン、ヘアカラーなど多くの人が一度は使用経験があり、これらは適度に使用できていれば支障をきたすものではない。しかし最近ではおしゃれがより過剰になり、身体に影響を及ぼす可能性がある危険なものも増えてきている。おしゃれに伴うトラブルは総称して「おしゃれ障害」^{1) 2)} と呼ばれ、さまざまなおしゃれによる健康被害が報告されている。実際に女子学生に生じているおしゃれ障害は¹⁾、体毛処理による皮膚の障害・化膿、頭髮の脱色・染毛やパーマ・ヘアアイロンによる髪の毛の傷み・皮膚のかぶれ、コンタクトレンズの使用による目のトラブルなどが報告されている。近年では低学年からメイクをする女子が増加しており⁴⁾、小・中学生から大学生と幅広くおしゃれ障害が報告されている^{2) 3) 5)}。

看護や医学を学ぶ女子学生は、一般の女子学生よりも体に生じる障害に対して意識が高いと考えられる。この

ような対象では、おしゃれ障害の体験は一般の女子学生より低いと予測されるがその実態は明らかでない。そこで、本研究では医学および看護を学ぶ女子学生の「おしゃれ障害」の実態を明らかにすることを目的に調査を実施した。

II. 研究方法

1. 対象および調査期間

A大学に在学する医療系の女子大学生1～4年生から2016年4月に協力者を募った。同意が得られた200名に対して協力者に無記名の質問紙調査を実施し、有効回答が得られた158名(79.0%)を対象とした。

2. 調査方法

調査は授業後に説明し質問紙を配布、実施した。実施後すぐに質問紙を回収し、授業後に質問紙を提出できない協力者に対しては回収箱を設置し、後日提出してもらった。

3. 質問紙の内容

- 1) 基本属性として所属学部・学科, 年齢, 身長, 体重を質問した。
- 2) おしゃれ障害の内容は先行研究^{1) 6)} 参考に, 頭髪, 爪, 肌, 体毛, アクセサリー, カラーコンタクトレンズ, メイク, 衣服から構成されるおしゃれ内容 16 項目を作成した。16 項目について, (1) おしゃれ行為経験について「なし」「あり」の中から選択を求め, さらに, 「あり」の者に対して (2) 16 項目のおしゃれ障害の体験について, 「なし」「何度か」「頻繁」の中から選択してもらった。

4. 分析方法

対象者の属性や, おしゃれ行為経験とおしゃれ障害経験の程度について単純集計を行い, 回答の選択肢の度数分布をみた。おしゃれ行為経験 16 項目について, 「なし」=0 点, 「あり」=1 点とし, おしゃれ障害経験 16 項目について, 「なし」=0 点, 「何度か」=1 点, 「頻繁」=2 点として点数化し, それぞれの合計点数を算出した。おしゃれ行為経験の合計点数とおしゃれ障害体験の合計点数を Spearman の順位相関で検討した。おしゃれ行為経験の合計点数とおしゃれ障害経験の合計点数のそれぞれについて, BMI と有意差があるかを一元配置分散分析によって判定した。統計処理には SPBS ver 9. を用い, 有意水準 5% 未満を有意差ありとした。

5. 倫理的配慮

研究協力者には研究目的と参加は自由意志であること, プライバシーを保護することを書面と口頭で説明した。回答は無記名として, 質問紙の提出をもって同意とみなした。

III. 結果

1. 対象者のプロフィール

表 1 に対象者のプロフィールを示す。平均年齢 19.4 ± 11 歳, BMI 20.6 ± 2.7 であり, やせ 23 名 (14.5%), 標準 96 名 (60.7%), 肥満 6 名 (3.7%) であった。おしゃれ行為経験合計点数 9.9 ± 2.8, おしゃれ障害体験合計点数 5.1 ± 3.7 であった。

2. おしゃれ行為経験とおしゃれ障害

おしゃれ行為経験の割合を図 1 に示す。おしゃれ行為経験が「あり」と回答した者によるおしゃれ障害の体験割合を図 2 に示す。図 2 はおしゃれ障害を「何度か」及び「頻繁に」を合わせ, その回答割合が高いものから順に並べている。

表 1 対象者のプロフィール

項目	Mean ± SD
年齢 (歳)	19.4 ± 1.1
身長 (cm)	158.8 ± 5.8
体重 (kg)	51.9 ± 7.9
BMI	20.6 ± 2.7
おしゃれ行為経験合計点数 (点)	9.9 ± 2.8
おしゃれ障害の合計点数 (点)	5.1 ± 3.7

おしゃれ行為経験で 90% を超える項目は, 「化粧品・保湿乳液」が 97.5%, 「ファンデーションや口紅などのメイク」および「体毛の自己処理」が 94.9%, 「アクセサリ」が 94.3% であった。次いで, 「ヒールや足に合わない靴」および「パーマ・ヘアアイロン」が 80% 以上, 「整髪料・ワックス」, 「アイメイク」, 「マニキュア・除光液・つけ爪」が 70% 以上, 「ヘアカラー」, 「薄着や露出の多い服」が 50% 以上であった。比較的, 経験が低かったおしゃれ行為は, 「専門店での体毛処理」, 「二重瞼の形成商品」, 「ピアス」が約 20%, 「カラーコンタクト」, 「つけまつげ・まつ毛エクステ」が 10% 程度であった。

おしゃれ障害において最も高かった項目は「ヘアカラーによる髪の毛の傷み, 頭皮のトラブル」であり, 「何度か」「頻繁に」を合わせた割合は 77.8% であった。次に多かったおしゃれ障害は「専門店での体毛処理による皮膚のトラブル」であり, 「何度か」「頻繁に」を合わせた割合は 65.9% であった。その次に多かったおしゃれ障害は, 「マニキュアや除光液, つけ爪による皮膚や爪のトラブル」であり, 「何度か」「頻繁に」を合わせた割合は 46.9% であった。逆におしゃれ障害の少なかった項目は, 「アクセサリによる皮膚のトラブル」や「アイメイクによる目の周りの皮膚のトラブル」であり, 1% 程度であった。

おしゃれ行為経験の合計点数とおしゃれ障害体験の合計点数を Spearman の順位相関で検討した結果, 有力な正の相関が確認された ($r_s = 0.40$, $p < 0.0001$)。

BMI から痩せ・普通・肥満の 3 群に分け, おしゃれの行為経験の合計点数とおしゃれ障害体験の合計点数のそれぞれについて一元配置分散分析を行った結果, 有意差は認めなかった。

IV. 考察

本研究のおしゃれ行為経験は, 化粧品・保湿乳液の使用やメイク, 自身でできる体毛処理, アクセサリの使

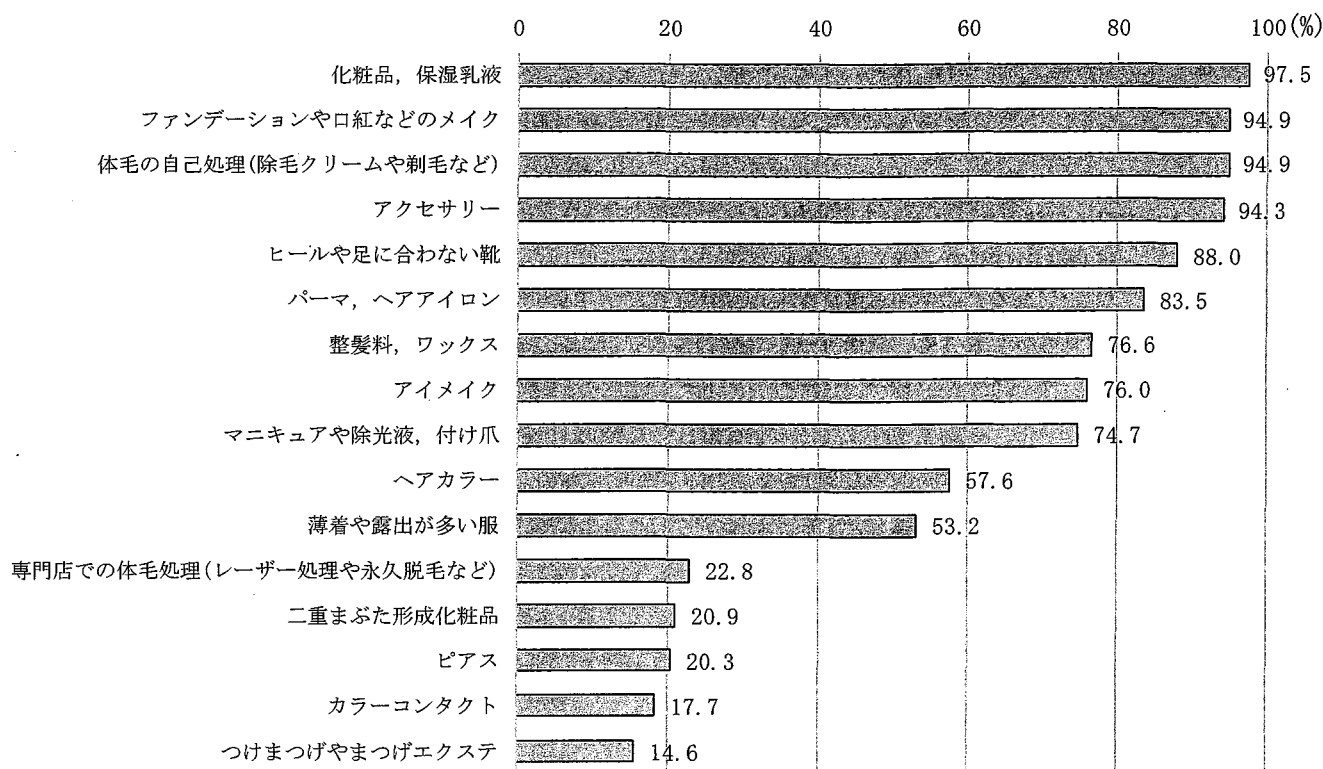


図1 おしゃれ行為経験の割合

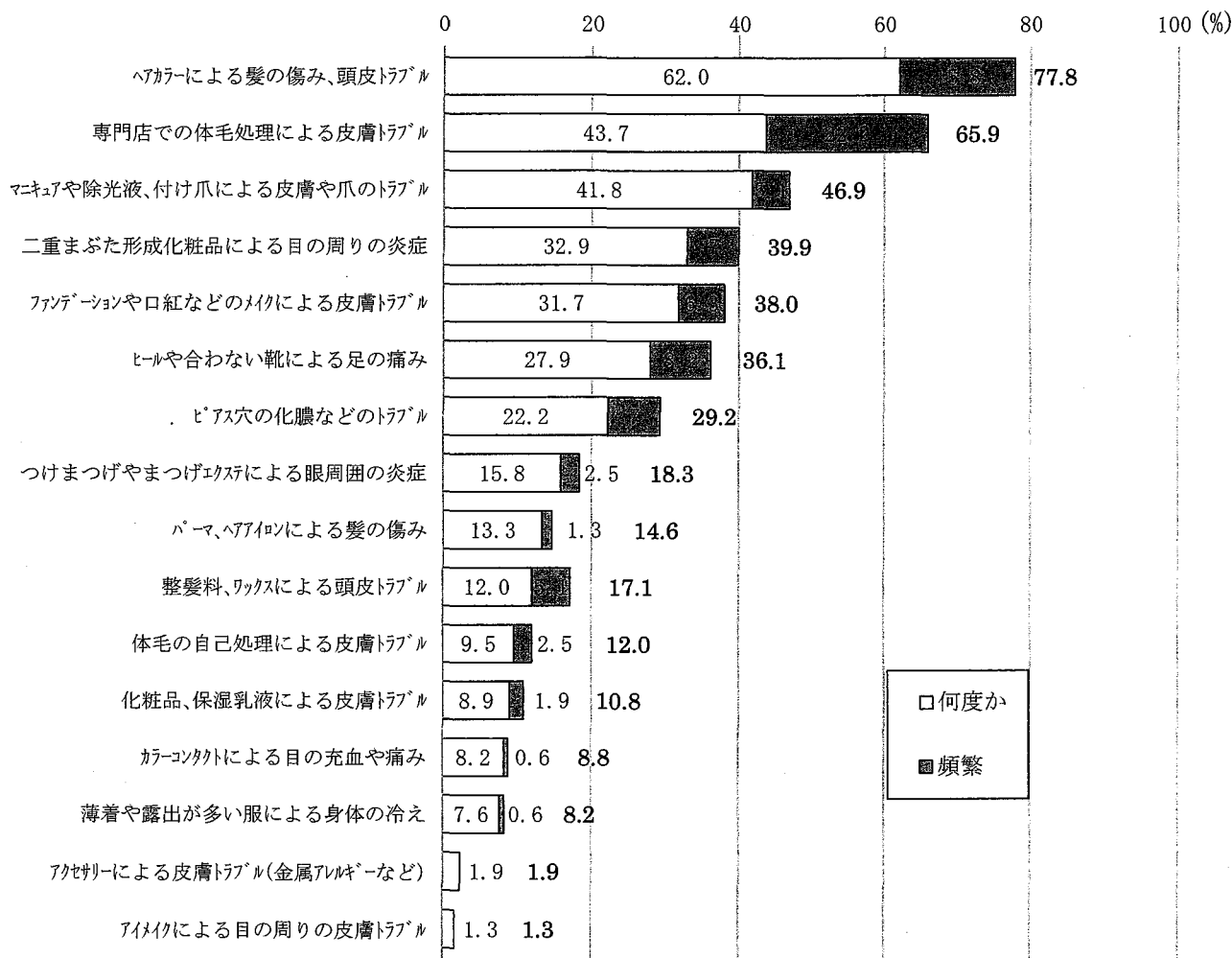


図2 おしゃれ障害の割合

用、ヒールや足に合わない靴、パーマ・ヘアアイロンなどの頭髪に関するおしゃれ、などの経験が多く、専門店での体毛処理、ピアスやカラーコンタクト、つげまつげやまつげエクステなど専門店でのサービスや購入が必要なおしゃれは少なかった。これは、先行研究とほぼ同様の結果^{1) 6)}であり、医学、看護を学ぶ学生であっても、一般女子学生と同じ傾向のおしゃれを楽しんでいるといえる。化粧品、メイク、アクセサリ、頭髪に関するおしゃれは女子学生でも手軽に自分で行うことができるおしゃれ行為であるため、割合が高いと思われる。専門店でのサービスや購入が必要なおしゃれは、高額になるため学生にとっては経験しづらく、割合が低いと考えられる。しかし、経験は少なくとも専門店での体毛処理のおしゃれ障害の体験割合は6割以上と、比較的高い値であった。先行研究¹⁾では、専門店でのサービスが必要なおしゃれは行為経験の割合、おしゃれ障害の体験割合ともに低い値であり、本研究とは異なる結果が得られた。これは、看護や医学を学ぶ女子学生は身体の状態に関して知識があり、皮膚の状態の変化に気付きやすく、一般的な女子学生よりも自分自身の体の観察力が高いため、わずかな皮膚のダメージを敏感に察知し、専門店での体毛処理のおしゃれ障害の体験割合が高くなったと考えられる。

ヘアカラーの経験割合は、おしゃれ項目の中では決して高い順位ではないが、おしゃれ障害の中では「何度か」「頻繁」を合わせて77.8%と最も高い割合となっている。女子中学生や女子高生のおしゃれの情報源として雑誌が挙げられ、あこがれの的のモデルは髪を染めた者達が多く、いわゆる「茶髪志向」が高まっている²⁾。しかし実際には中学校や高校は規則があるために髪を染めることなどは難しい。よって多くの「茶髪志向」の女子中高生が大学生になったときに念願のヘアカラーを行い、それによるトラブルが多く生じているのではないかと考えられる。

ファンデーションや口紅などのメイク、ヒールや足に合わない靴は、経験が高いおしゃれ行為であり、おしゃれ障害も約4割近くと比較的高い発生率である。しかし、化粧品や乳液、剃毛の自己処理、アクセサリ、アイメイクも経験の高いおしゃれ行為であるが、おしゃれ障害の体験割合となるとそれほど高くはなく、アイメイク、アクセサリでは1割程度である。おしゃれ障害の発生頻度は、多くの女子学生が経験しているおしゃれだから高いというわけではないと考えられる。

本研究では、おしゃれ行為経験の合計点数とおしゃれ障害体験の合計点数は有力な正の相関が確認された。おしゃれ行為経験の種類が多いほどおしゃれ障害を体験しているといえる。先行研究¹⁾においても様々な種類のおしゃれ行為を楽しんでいる学生ほど、多種類の健康被害に遭遇している。おしゃれ行為に関心がある者は、おしゃれをすることに積極的であり、様々なおしゃれを

併用していることに加え、頻繁におしゃれをしているため、必然的におしゃれ障害を体験する頻度が高くなっていると考えられる。おしゃれ障害は、おしゃれを重複して行う状況によって、発生しやすくなるといえる。

若い女性には「『美』は盛る」「体重は削る」という意識が強い⁸⁾と言われており、体型が痩せている者は、より多くのおしゃれを行っているのではないかと予測していた。しかし、BMIとおしゃれの行為経験の割合、おしゃれ障害体験ともに明らかな関係はみられなかった。現在はふくよかな女性を対象としたファッション雑誌やファッションブランドがあるなど、様々な体型に合ったおしゃれな衣服、アクセサリ、靴などが販売され、メディアで情報を得ることができるため、体型に関係なくおしゃれを楽しんでいると考えられる。

本研究から、医療系女子学生のおしゃれの行為経験は、手軽に自分で行うことのできるおしゃれが高く、専門店などのサービスが必要なおしゃれは少なく、一般の女子学生と同じ傾向であった。また、おしゃれ障害はおしゃれ行為の種類が多いほど発生しやすいと考えられた。医療系女子学生は身体の知識により、おしゃれによって発生する身体の変化に敏感であることが推測、示唆された。

V. 文 献

- 1) 大見広規, 小坂夏紀・他: 美容に伴う健康被害(おしゃれ障害)発生頻度調査. 名寄市立大学保健福祉センター CAMPUS HEALTH 51(2): 222 - 227, 2014
- 2) 大久保香梨, 斎藤ふくみ: 小中学生のおしゃれに関する研究 主におしゃれ障害に関して. 茨城大学教育学部紀要 教育科学 63: 219 - 230, 2014
- 3) 岡村理栄子: 子どもたちのおしゃれ障害(教育セミナーおしゃれで安全な化粧品とは). 日本化粧品学会誌 35(2): 113 - 117, 2011
- 4) 石田かおり: 児童・生徒の化粧実態とその問題点 - 化粧教育提案のための実態分析 -. 駒沢女子大学研究紀要 13: 27 - 41, 2006
- 5) 岡本理栄子: おしゃれ商品の低年齢化戦略と子ども・若者のからだ. SEXUALITY 67(7): 30 - 37, 2014
- 6) 鈴木公啓, 矢澤美香子: 大学生及び短期大学生における装い起因障害の実態把握. FRAGRANCE JOURNAL 42(8): 52 - 59, 2014
- 7) 馬場直子: 皮膚の健康と疾患対策. 小児科診療 77(9): 1213 - 1218, 2014
- 8) 香山リカ: 思春期の美に関する意識 - “ありのまま”ではられない -. 思春期学 32(3): 291 - 293, 2014